

丸山方作の人生と甘藷

淑徳大学教授

まえだ ひさのり
前田 寿紀

はじめに

甘藷の塊根部分（一般にさつまいもと言われる所。以下、甘藷と呼称）は、栄養豊かでおいしい（ただし、戦中に開発・普及された品種はおいしくなかったという意見・感想もある）ものであり、世界中で愛好家が多い。しかし、わが国は戦中に国家政策として、甘藷がアルコールにされそれがガソリンに混入されることにより、零式艦上戦闘機などの武器を動かす軍用液体燃料の一部にされたという特異な状況を体験した。このことは、本来人々を養う甘藷が、人々の命を奪う材料にもなったということでもある。結果的にでもこの国策に協力することになった（またはせざるを得なかった）人・組織（例、甘藷を供出した農家）は数多い。戦中のわが国でおそらく最も着目された「丸山式」甘藷栽培法を作った丸山方作（以下、丸山と略称）もその一人であった。本稿では、人物史としての丸山を5つの時期区分を基に描いてみたい（丸山が関わった重要な人物・組織は、表1参照）。

I. 第1期：「大日本報徳社」の「農事講師」

（昭和10年12月5月～）になる前まで

慶応3年、八名郡下川村大字牛川（現、愛知県豊橋市牛川町）に、矢野慶助の次男

として生まれた。ここ東三地方（東三河地方－引用者注）は、明治初年頃から、豊橋の旧名の吉田にちなんで名づけられた吉田藷の産地で、明治20年頃までは甘藷が畑の主要作物であった（丸山 昭和13年3月、p.26。丸山著書は、本文中に記載）。

学制スタート時に、「正太寺」（浄土真宗。生涯大きな感化を受ける大河戸挺秀〈小野湖山、渡辺華山の子・渡辺小華などに師事〉が住職）内に仮設された小学校に入学。9歳で母を失うが、「父兄の善き導きと大河戸師の良き教へ」により、「心身共に安きを覚ゆる」（『心の写真 第三編』明治25年1月8日）のであった。愛知県選抜の士官学校の候補者3人の1人として上京・受験するが、失敗。明治19年8月、東京麻布「学農社」（津田仙〈農学者・キリスト者。津田梅子の父〉主催）に入学。津田仙から「『君も士官学校に入つて人を殺す道を勉強するよりも農業を学んで人を活かすことをやつてはどうか』／と云はれ大に農学を研究しようとした」（杉本、p.13～14）。若い頃、大河戸や津田の影響で宗教にひかれた。しかし、「先づ農業農学を兼ね究め、農業上に於いては通常農夫より一步上進したるの農者となり、而して間接に人を導くの法を施すことを欲」（『心の写真 第三編』）した。青年時代から、津田仙主催の農業雑誌、農

表1. 丸山方作が関わった重要な人物・組織

(1) 「大日本報徳社」

弘化3（1846）年、二宮尊徳（以下、尊徳と略称）の風呂焚きをしていたと言われる安居院庄七（別名義道）によって遠州地方（現、静岡県西部地方）に伝導された報徳の教説を基に、岡田佐平治らの「報徳連中」が、幕末に報徳社を結成し農村復興を図った。各村々の報徳社を統一する本社として「遠江国報徳社」（以下、「遠社」と略称）が設立（明治8年11月。創立総会開催場所は、浜松県敷知郡浜松宿〈現、静岡県浜松市田町〉「玄忠寺」。後、浜松第一館、見付第二館、掛川第三館、各地出張所を設立）。「遠社」は、尊徳のいわゆる「四高弟」の一人である岡田良一郎（以下、良一郎と略称）が2代目社長（明治9年4月～）。「遠社」は、明治44年11月から「大日本報徳社」（以下、「大社」と略称。良一郎が、明治45年1月まで社長。大正13年6月～静岡県小笠郡掛川町〈現、静岡県掛川市掛川〉）と改称。「遠社」「大社」は、「訓導」（明治31年～）、「名誉訓導」（明治42年～）という報徳などを教える人々、「農事講師」（明治31年～）という農業上の知識・技術を教える人々を、「大社」は「講師」（大正11年～）を抱えた。「遠社」の別働隊として、農事改良を図るため、明治11年2月、静岡県佐野郡掛川宿（現、静岡県掛川市掛川）に「掛川農学社（舎）」（以下、「農学社」と略称）を開設（社長は良一郎）し、以下のこと他を行った。①「集談会」（明治11年2月～）の開催。②機関誌『勸農俚諷集』やパンフレットの発行。③「農学教員」「農事（巡回）講師」の雇用。※明治11年7月から、講師を雇い、「村々ヲ巡回セシメ」た（岡田良一郎『第二回巡回紀行』明治15年）のが「農事（巡回）講師」の始まりと思われる。（cf.農商務省および「大日本農会」が、「農事巡回教師」の制度設立は、明治18年～同26年）。④「種芸場」「植物園」設置による実験（～明治21年12月頃）の奨励（cf.国立の農事試験場の嚆矢「西ヶ原農事試験場」設立〈於 東京府〉は明治26年4月、農商務省の「府県農事試験場規程」公布は同32年8月）。

(2) 河井弥八

河井弥八（以下、河井と略称）は、「大社」副社長（昭和13年2月24日～同20年2月27日）・社長（同20年2月27日～同35年7月21日）以外に、内大臣秘書官長、侍従次長兼皇后宮大夫、貴族院議員、財団法人帝国治山治水協合理事、「東遼明朗会」（後述）会長、食糧対策審議会委員、内閣委員会委員長、参議院議長（昭和28年～）等多くの経歴をもつ。戦中・戦後には甘藷増産を強く訴え、特に戦中には中央の食糧増産関係の重要人物を動かし、丸山作成の「丸山式」甘藷栽培法等を広域に普及させた。

農商務省発行の『農商工報』、「大日本農会」の『大日本農会報』等（『日記』等）を講読したようである。若い頃から老農への訪問、老農との書簡のやり取りなどで学び、実地に基づく研究をした。同20年、船津伝

次平が愛知県下を巡回講義した際に随行。この頃、報徳の道に熱心な八名郡長服部直衛と農務課長鈴木平五郎は、丸山に八名郡の農事巡回講師となることを推奨、鈴木から、富田高慶著『報徳記』を貰って読んだ

(杉本、p.38)。同26年、「三河農会」が設立され、会長古橋源六郎義真（報徳精神の持ち主）等と連絡をとり農業団体発展に寄与。同25年、愛知県八名郡農事技師、愛知県南設楽郡農事巡回教師。同27年11月、愛知県南設楽郡新城の老農丸山久太郎の長女なをと婚姻、丸山家の者となった。同30年12月、帝国農家一致協会普通同盟員。

明治33年3月、静岡県「榛原郡農会」教師、同4月、静岡県「榛原郡農事巡回教師幹事」嘱託。愛知県から静岡県赴任となった経緯は、農商務省農産課長の伊藤悌蔵が、西ヶ原農事試験場（愛知県安城に支場あり）に相談し、「農事熱心で、出張してもなかなか鋭い質問責に遭ふ」静岡県の指導者として丸山がよいという人選になった(杉本、p.18)。榛原郡における篤農講習会により各町村の中心人物養成に尽力。「榛原郡農会」教師時代に、榛原郡の飯田栄太郎（大正4年「勝間田報徳社」設立、同5年「中報徳社」社長、同13年～昭和14年「大日本報徳社」〈表1参照〉理事、という経歴をもつ報徳社の重要な人物。明治34年、飯田が丸山と同行し講習会に出席〈飯田家文書『歴誌』〉。以下、飯田と略称）に出会ったと思われる。なお、愛知県内に在職中の明治35年2月、故郷の東三地方に「遠社」の「豊津出張所」（現、愛知県豊川市）が設立された（後、「東三出張所」〈大正12年からか。所在地は現、豊橋市〉）。

「静岡県農会」顧問・農政学者高橋昌（横井時敬と同窓）の知遇を得、明治36年、「静岡県農会」技師を嘱託（～大正8年）。この時期、①「静岡県農会」主催「高等農事講習会」（伊藤悌蔵創案。米麦作を主とし、製茶と養蚕を主副業とし、その基礎となる

生理、土壌、肥料、経済、栽培、病虫害等の講師を委嘱し、各郡役所所在地を会場に順に開催した講習会。後に「大社」役職員になる飯田・田辺三郎平・一木藤太郎、後に「大社」増産講師になる藤田久蔵・山本福吉・田村勉作・高平勇・石原民次郎も受講）の計画、幹事役、引き受け手のない科目の担当、②農村経営調査（農家経営の実態調査）の仕事をした。また、この時期、多くの報徳社の人々または後に報徳社の社員となる人等に出会った。また、「（中央）報徳会」機関誌『斯民』を購入した（『日記』M45.12.1、等）。大正3年2月、帝国農会役員表彰。

大正7年、静岡県志太郡農業技師（内閣辞令）。この時の郡長は、飯沼一省（後、静岡県・広島県・神奈川県知事、内務次官）。飯沼が大正7年6月に発会させた農事研究会「斯民会」の『斯民会報』の原稿作りに精力を注いだ。農業技師として飯沼と連絡を取りつつ自転車で長距離、山道を東奔西走して仕事（『日記』）。大正10年8月、従七位に叙せられた。同12年4月、退職。

大正12年4月、静岡県から愛知県豊橋市花田南島に転居。同15年1月1日現在、同地に在住。

有志と共同での甘藷栽培法の研究は、以下のように第1期から行っていた。

- ・大正14年7月4日、「神奈川県農事試験場」に注文の「試作用甘藷苗」到着。試作地の件で、小沢豊、豊橋市西山の伊藤政七、平川の田中祐次の所に出張。
- ・昭和5年8月7日、宝飯郡御津町の安達勇次郎始め「研究試作人」10数名で、実地をみる。

大正14年12月22日、静岡県引佐郡三ヶ日

町福長に柑園を購入。昭和4年1月1日現在、新城町に在住。昭和5年4月3日、「第一回丸山会」（於 愛知県豊川町元町の石黒材木店。おそらく、これが「丸山会」の嚆矢。愛知県八名郡の古田豊平が提唱）を開催。「丸山会」（後、「明朗会」という研究会も設立。明朗とは、丸山の号）とは、丸山と研究・学習をするために各地に多数結成された研究・学習会である。『日記』（S7）によると、昭和7年現在の「丸山会」会員は、24名。後、大きな組織となっていた。

「大社」講師になる以前に、「大社」支社で講演・講話。例、昭和8年10月25日、（磐田郡から引用者注）「報徳联合会」で、「甘藷ノ経済的増収法」を講述。

なお、丸山は、「丸山柿」（昭和9年に、「東京市中第一流ノ果物商店」「丸山会員ノ生産品ヲ歓迎要望スルニ至」った丸山作成の柿）、「丸山旭」（丸山選出の米の品種名）からわかるように、得意とする作物の守備範囲は広がった。丸山は、柿は地上になる甘藷、甘藷は地中になる柿とし、「甘藷増産のヒントは実は柿の栽培から得られた」と述べた（杉本、p.63）が、丸山には作物の性質を洞察する鋭さが窺える。

第1期を通して、自ら目指した“通常農夫より一步上進したるの農者”、“間接に人を導くの法を施す”農者に邁進していたことが窺える。

Ⅱ. 第2期：「大日本報徳社」の伝統の中に入っていた時期：昭和10年12月5日～同13年4月2日

1. 「大日本報徳社」講師の仕事に入っていく様子

昭和10年11月1日、飯田の案内で、「大社」

の「掛川報徳館」に行き、図書館で「二宮先生遺書ヲ覧」た。同年12月5日付で、丸山は「大社」講師を委嘱された（数えて69歳の時。丸山の「大社」での役職は、昭和10年12月5日～同27年1月1日に「大社」講師、昭和27年1月1日～同38年6月16日〈亡〉に「大社」名誉講師）。「大社」に丸山を入れたのは飯田と思われる。同年12月16日、「大社」において、事務員1人に面会、挨拶をし、「携帯ノ甘藷図」を示した。

丸山は、「大社」講師として仕事を数多くこなした。甘藷に限っても、甘藷に関する講演・講習・講義、実地指導、研究会開催、原稿作り、等を行った（『日記』）。「大社」講師となり、早速機関誌に「甘藷多収穫 栽培の要領(1)」(『報徳』35.2、S11.2)から「甘藷多収穫 栽培の要領[3]」(『報徳』35.4、S11.4)を連載。第2期の甘藷関係の著書は、以下のとおり。

- ・丸山（昭和13年3月）『根本改良 甘藷栽培法』大日本報徳社（これを、丸山 昭和13年3月、と表記）。
- ・丸山（昭和13年3月初版。同17年2月改訂増補3版）『生理応用 甘藷栽培法』大日本報徳社。

2. 丸山方作の農業観・報徳思想、人生観

丸山は、静岡県・愛知県等の報徳の土壤がある地域で活動をする中で、第2期以前から報徳思想（農業とも関わる）を自然に受け入れていたと思われるが、彼が第2期に示した農業観・報徳思想が窺える箇所を、〈丸山 昭和13年3月〉からみてみよう。

「無数の植物界中、人類の生活に便利な物を選び、一層人の需要に適応するやうに進化せられた物」が「作物」。農作物は、

「必ず先づ其種苗を大地に授け、爰に温熱、空気、水分等の自然要素と融合して、生命の活動を萌め、爾後間断なく、同化作用に依て融合一体となり、次第に体質を増大し、其極開花結実を終れば、漸次異化作用（同化と反対の作用）に移り、生命を種子に伝へて死に至る」という「天道の偉大な働き」を示す。農業は「天地の化育を賛くる尊い仕事」で、「従事する者」は「大自然と融合一体の心を以て、国家社会を弥栄にする神業への奉仕参加でなければならぬ、斯くして自他共に恵まれ延ひて世界人類への貢献ともなる」。「(作物がー引用者注) 現在の形態に化育せられるまで、幾百千年に亙る数多先人の労苦を偲び、其恩徳を謝すると共に、更に改良の歩を進めて、之を後の人に譲るは、吾人当然の務めなり」。「伝統的農法を反復するのみに止まる農法」は「勤勉」ではある。また、「科学の力は偉大」だが「科学は永久に進歩の過程にある」ので「之れのみを以て総てを解決せんとするは難」しい。勤勉さと科学の両方の素養があって、自然の暗示がわかり「天道」に^(かな)適うことができる。甘藷は、「千遍一律の習慣に拘泥することなく、其地適応の方法を考究し、…増収の余地を有し、諸作物に超越せる生産力を利用して、人類生活に有用な物資に変化させるには実に適当な作物なり」。甘藷を「今一層人類に役立ち、非常時局にも活躍するやう致した」い。

また、丸山の人生観としては、例えば、昭和10年に、「人間をして幸福ならしむるは感謝報恩の念より大なるは無し 人生徳に入るの第一歩は実に此念の長養にありト

^(ローマ)ハ羅馬ノ賢帝マルクス、アウレリウス、アントニウスの静思録を読む毎に痛切に感ずる 法多蘇峯 10.9.11」(『日記』S10)と綴っているように、周囲への「感謝報恩の念」があった。

なお、丸山は、第2期には、甘藷から軍事用液体燃料を作ることを知っていた。例えば、昭和11年6月10日、「三ヶ日町青年団一夜講習会」で「甘藷用途 液体燃料ノ必要ヨリ其原料トシテ 及挿苗法」を講話した。また、同年8月14日、飯沼一省による丸山宛の暑中見舞に「甘藷増収ノ件 液体燃料原料トシテ国策上ノ重要件」と書かれてある旨、日記に記した。上記農業観・報徳思想にある「人類に役立」つ甘藷と「非常時局にも活躍する」甘藷とは矛盾することも起こるが、丸山は「非常時」の「国策上」重要な「液体燃料」になる甘藷を否定していなかったようである。

Ⅲ. 第3期：戦争に関わったまたは関わらざるを得なくなった時期：昭和13年4月3日～同20年8月15日

1. 第3期の特異な状況と丸山方作

ガソリン・アルコール混用に関して、政府が本格的に動き出したのは、(丸山でいう第2期にあたる)昭和11年頃と思われる。極秘で進められたこと、公になりにくかったことも多かったと思われる。国策としての大がかりな甘藷増産は、(1)人々の飢えを救うという意味、プラス(2)総力戦・食糧戦を支えるという意味、プラス(3)軍事用液体燃料を大きく含むところの液体燃料確保としての意味、という3重の複雑な意味があった。

昭和13年2月24日、丸山の後から、丸山

にとって重要な人物となる河井弥八（「大社」本社のお膝元の現、掛川市の地で生まれ育っていた。表1参照）が、「大社」副社長（昭和13年2月24日～）として「大社」に入社した。同年4月3日、「掛川報徳館」で、飯田栄太郎、副社長佐々井信太郎（昭和初期に『二宮尊徳全集』を編纂した人物－引用者注）の紹介で、社長^{いちききとくろう}一本喜徳郎（岡田良一郎の息子。生涯で「法科大学」教授、文部大臣、内務大臣、宮内大臣、等歴任－引用者注）、副社長河井と面会した。

河井は、昭和14年12月5日に至ると、「丸山式」甘藷栽培法から確かな手応えを受け、「大ニ实际的知見ヲ確実ニス」と日記に記した。この「实际的知見」に関しては、食糧増産としての「实际的知見」があったと考えられるが、軍用液体燃料製造としての「实际的知見」がなかったとは断定できない。

第3期は、丸山にとっても、激動の時期であったと考えられる。丸山は、河井に乞われ、河井の厳しい要求に応えつつ、老体にも関わらず全国で通じる甘藷栽培法の研究活動と普及活動をよくやった。第3期の甘藷関係の著書は、以下のとおり。

- ・丸山方作先生口述（昭和17年1月）『丸山式甘藷増収法』小田原市役所。
- ・丸山（昭和17年11月頃か）『甘藷良苗育成法大要』大日本報徳社、『日記』S17.11.17による。
- ・丸山（昭和18年2月以前）『甘藷の貯蔵法』大日本報徳社。
- ・丸山方作述（昭和18年9月）『甘藷栽培早わかり』大日本翼賛壮年団本部。
- ・丸山方作先生口述（昭和18年10月）『丸山式甘藷増収法』神奈川県尊徳会。

2. 「丸山式」甘藷栽培法の研究活動と普及活動（表2）

3. 「丸山式」甘藷栽培法とそれによる反当りの収穫量

「丸山式」甘藷栽培法は、①「良苗」使用、②高畝使用、③水平植、④粗植、⑤塊根になりやすい条件に注意を払う、⑥塊根形成後も悪変化を導く条件を避ける、等を特色とした。「良苗」とは、「植傷み少く、挿苗直後に藷となるべき根が出るから安全に^(で)確実」である1尺2寸～1尺5寸（約36.4cm～約45.5cm－引用者）のもの（丸山 昭和13年3月、p.63）であった。この栽培法による反当りの収穫量は次第にあがり、全国平均 300貫半ばという時期に、1000貫を超えることはめずらしくなく、2000貫以上を記録することもあった。

4. 「丸山式」甘藷栽培法への批判

「丸山式」甘藷栽培法は、おそらく戦中のわが国で最も着目されたこともあり、それゆえに、農林省農事試験場児玉敏夫による粗植に関する批判（昭和24年8月）、伊東秀夫の研究・理論による早期塊根形成理論に関する批判、等多くの批判も受けた。丸山は、甘藷づくりに対する多くの視点に回答することに苦勞したと考えられる。

5. 戦争と丸山

丸山は、第3期に戦争遂行の考え方を全く抱かなかったとは言えない。例えば、昭和17年2月、著書〈丸山 昭和17年2月改訂増補3版〉冒頭に、「大政を翼賛することは、日本帝国臣民たる者の身命を捧げて奉仕すべき当然の行為で、戦時平時の別な

表2. 丸山方作の第3期における「丸山式」甘藷栽培法の研究活動と普及活動

1. 「丸山式」甘藷栽培法の研究活動

研究活動においては、昭和18年7月15日、財団法人「三井報恩会」から「研究助成金」2000円（『日記』S18）、同20年6月19日、農商省補助金として3万円（『河井手帳』宮S20.6.19）もあったようである。

(1)主体

①丸山方作

②丸山方作と丸山方作以外の人々

ア.「甘藷栽培研究同志者」との研究活動…「甘藷栽培研究同志者」（以下、同志者と略称）とは、丸山と共同で甘藷栽培法の研究をした仲間。昭和13年3月現在、小沢豊、磯部幸一郎、田村勉作、藤田久蔵など7名（丸山 昭和13年3月、pp.96～97）。昭和17年2月現在、33名（丸山 昭和17年2月、pp.189～190）。33名は、静岡県18名、愛知県12名、長野県1名、千葉県1名、三重県1名。

イ.「丸山会」「明朗会」等の人々との研究活動…第3期からの「東遠明朗会」（昭和16年2月～）、「西遠明朗会」（同17年1月～）、「駿州明朗会」（同18年4月～）。

ウ.「大社」本社・支社の人々との研究活動…代表例が、河井との研究活動。また、丸山を講師に招聘し、「丸山式」甘藷栽培法を研究する「大社」支社の人々も多かった。

エ.「甘藷栽培試験委託」者との研究活動…「甘藷栽培試験委託」者とは、丸山が、甘藷栽培試験委託をした人（以下、委託者と略称）。昭和18年度における試験地は、愛知県9か所、静岡県2か所、長野県1か所、岐阜県1か所、試験地面積は、6.4町。委託事項は、土質対品種、育苗、多収法、苗対株数、整地、肥料、生理的研究、土地対品種、貯蔵、品種特性、特殊栽培研究、品種。なお、『日記』には、「甘藷研究地二十一ヶ所ニ対スル試作設計書」（『日記』S18.6.4）、「甘藷研究地担当者26名」（『日記』S18.7.9）の記述もある。

オ.多くの研究者の協力…「京都帝国大学」教授・理学博士郡馬寛、同大学今村駿一郎、同大学芦田譲治（丸山 昭和24年、p.197、他）。小野武夫博士（杉本、p.57）。「鹿児島農事試験場」の丸山政彦（同上）。「東京高等農林学校」教授の伊東秀夫（前、「興津園芸試験場」。後、東北大学教授。－引用者注）（『日記』S17.4.23）。丸山が、昭和17年7月31日～同年8月14日（『日記』S17.7.31、S17.8.1）に、台湾視察に行った際に、「台湾農事試験場」の嘉義場長平間莊三郎（杉本、p.57）。その他、多数の農事試験場の場長・技師等。

(2)方法

①情報収集の方法

ア.直接観察、イ.聞き取り、ウ.書簡等による調査、エ.図書、「大日本農会」「帝国農会」「日本園芸会」「興津園芸試験場」等の機関誌等の取り寄せ、オ.図書館、資料のあ

る場所への通い。

②研究の方法(1)

ア. 観察（掘り出し・写真撮影・描写）、イ. 実験（顕微鏡、化学薬品、等使用もあり）。

③研究の方法(2)

ア. 事例研究、イ. 統計研究、ウ. 比較研究（a. 品種間の比較研究、b. 同一品種での内的・外的条件による比較研究）。

(3)場所

①丸山方作の自宅

新城町の自宅は、柿園、甘藷の「研究圃」。ここに、後に、国会議員、歴代の農林省農政局長、県知事、大学の研究者等を始め、多くの人々が視察（『日記』）。

②丸山方作の自宅以外

同志者の土地、「丸山会」会員・「明朗会」会員の土地、「大社」本社・支社の人々の土地、委託者の試験地、農事試験場の土地等、自宅以外の土地での「丸山式」甘藷栽培のデータを参考にして研究活動。丸山は、場所が遠くても、良い種藷または種藷からとれる「良苗」を、自宅以外に送付または持参して「丸山式」甘藷栽培法で栽培してもらっても研究ができるという特色を生かしたと思われ、日本全国中にそれらを送付または持参し、書簡等で栽培結果の報告を求めた（『日記』）。

2. 「丸山式」甘藷栽培法の普及活動

(1)主体

①丸山方作

②「丸山式」甘藷栽培法を身につけた人

昭和17年1月、「大社」は、農林省賛助のもと食糧増産活動を起こし、「丸山式」甘藷栽培法を全国に普及させることとし、農事講師19名を嘱託し、全国に派遣（『報徳』41.2/S 17.2/48、『日記』S 17.1.12。以下、「大社」の食糧増産活動に動員された農事講師等を指して、増産講師と呼称）。同19年2月から、「大社」は、より多くの増産講師で北海道、東北、関東、北陸、東海、近畿、四国、中国、九州、朝鮮の各庁に応じて甘藷と麦作の増産実地指導。増産講師は、現在確認ができる者が43名。

③①と②の複合

(2)方法

①直接指導

直接出向いて、講演・講習・講義、実地指導。また、新城町の自宅等への視察・調査者にも実地指導（『日記』）。

②間接指導

ア. メディア利用… a. 著書等。 b. 「大日本報徳社」機関誌。 c. 各種雑誌等。 d.

説明書き。※丸山は、「丸山式」甘藷栽培法の説明書きを、甘藷苗の郵送時に添付したりもした。 e. 郵便物・書簡。※丸山は、郵便物を利用し、全国各地からの要請に応じ、甘藷苗の郵送（竹股知久氏談によると、これは難しい作業）による普及活動。 f. 映画。※「東遠明朗会甘藷試験地」での畜（牛）力使用による収穫を、「日本映画社」がフィルムに収めトーキー（筆者、未見）化し全国に宣伝（『報徳』41.1/ S 17.1/36、『日記』S 16.11.11）。 g. ラジオ。 h. 講演先の出版物。

イ.「大日本報徳社」増産講師派遣

(3)対象

丸山等による、普及活動の対象は、皇室、帝国議会議員、国の行政、研究者、等と多かった。昭和10年12月～同25年における丸山が主に「丸山式」甘藷栽培法で関わった道府県等は、丸山個人だけでも、北は北海道、岩手県から、南は鹿児島県、沖縄県、さらには、朝鮮、台湾までの普及活動エリア。昭和20年1月～同年9月における増産講師等の食糧増産活動のための出張は、北は、青森県三戸郡、秋田県、宮城県、新潟県から、南は、岡山県、広島県、山口県教育会、高知県、大分県。「大社」本社・出張所・館、支社の「常会」等にも出張。

①皇室、帝国議会議員、等

- ・甘藷栽培で大きく着目された他の篤農家と比較して、丸山に特徴的なことは、皇室・帝国議会議員から求められて、彼らに頻繁に「丸山式」甘藷栽培法を教えていたこと。これは、河井の人脈によるところが大きい。
- ・河井が、皇室・帝国議会議員と丸山とをつなげている様子は、〈A論文、表15〉。例. 昭和16年12月15日、河井の計らいで丸山を招いて、議員80余名に対する講話、晩餐。
- ・丸山による、皇居、御所、「新宿御苑」、恩賜公園、等への甘藷苗の植え付けに関するもののみでは以下〈A論文、表15〉。
 - ア. 昭和16年4月9日、各宮家、宮内省内匠寮、帝室林野局、学習院などの有志50名の前で、「丸山式甘藷栽培法」の講話・試作（於「新宿御苑」）。
 - イ. 同19年6月7日、丸山（随行1人）、「引佐農学校」校長中山純一、「大社」講師河西凜衛等が、大宮御所の奥庭（現在の東宮御所の辺り）の約1アール（30坪）の土地に、皇太后陛下用の甘藷苗を植えた。
 - ウ. 同月8日、井之頭「自然文化園」で、「甘藷栽培法ニ関スル」説明、実地指導。
 - エ. 同20年6月17日、同月19日、大宮御所で、甘藷苗の植え付け。
 - オ. 同23年4月12日、宮城内「庭園係事務所」に行き、「苗床設置」。
 - カ. 同年6月10日、「御座所焼跡」で植え付け方法を示した。事務所に帰り、苗床の隣に「整地植付の見本」を作った。
- ・戦中・戦後において、増産講師等が、農具をかついで、帝国議事堂（昭和11年11月7日竣工式）・国会議事堂内を歩いたことは、語りつがれている。昭和28年以降と思われるが、河井が「参議院議長公舎の床に丸山氏の画かれた藷の軸」（佐々井信太郎「河井先生を痛

惜する」、『報徳』1960.9.10月合併号（河井弥八先生追悼誌）、大日本報徳社、昭和35年10月20日、p.4）を飾っていた。これらより、丸山は、帝国議会議員・国會議員に知られていたと思われる。また、戦中・戦後における帝国議事堂・国會議事堂の前は、通路以外はほとんど甘藷畑であったと言われているが、「丸山式」甘藷栽培法による甘藷畑もあった可能性は大。

②農林省・農商省等の行政

- ・昭和16年5月1日～同月2日、丸山は、全国の精農家が集められた「大日本農会」主催、農林省助成「甘藷増産体験懇談会」（於「農林大臣官邸」）に出席し、「丸山式」甘藷栽培法を示した。この年以降、河井が発端を作って、農林省・農商省等の行政の人々等が、「丸山式」甘藷栽培法を知るために、丸山の自宅等への大がかりな視察をするというケースあり（A論文、表15）等）。その1回目が、昭和16年10月3日から同月5日の視察。
- ・農林省・農商省等の行政ではないが、丸山は、農林省内「農業報国聯盟」にも協力。次に、丸山は、加藤完治の「内原訓練所」における甘藷増産活動に協力し、「丸山式」甘藷栽培法（大苗床設置方法も含む）を多くの人々に教えた。

③道府県

④朝鮮、台湾、中国

⑤機関・施設、等（1部のみ）

ア.「神奈川県尊徳会」、イ.大阪商工会議所。

⑥市町村レベル

⑦「大日本報徳社」本社の館・出張所、支社

ア.「大日本報徳社」本社の館・出張所での「常会」等

イ.「大日本報徳社」本社の「常会」以外の講習会等

a.「第六回自治振興常会指導者練成会」（昭和16年11月6日）：本会后、静岡県掛川市南郷村上張（現、静岡県掛川市上張。河井の自宅またはその近隣か）に設立の「東遠明朗会甘藷試験地」での畜（牛）力使用による収穫を見学（『河井メモ』）。日本映画社は、これを撮影。

b.「大日本報徳社」の「全国甘藷増産指導員講習会」（昭和17年か）。

c.「大日本報徳社」の「食糧増産講習会」（昭和18年9月10日～同月14日）

ウ.「大日本報徳社」支社

⑧「丸山会」「明朗会」

⑨個人

〔出典〕前田寿紀（平成15年3月）「戦中・戦後における『大日本報徳社』の甘藷増産活動に関する研究(1)－『丸山方作日記』『河井弥八日記』の分析を中心に－」、淑徳大学社会学部『淑徳大学社会学部研究紀要』第37号（表2中では、〈A論文〉と呼称）。

く肇^(ちようこく)国以来一貫した我国独特の臣民道である」(p.1)と書いた。日本国内という枠内での報恩感謝の念が、戦争遂行肯定と結びついたのかもしれない。

Ⅳ. 第4期:戦後しばらくの食糧難の時期、人々の飢えを救う任務をした時期:昭和20年8月15日～しばらく

敗戦により、Ⅲ-1で述べた国策としての大がかりな甘藷増産の3重の複雑な意味のうち(2)(3)が落ち(1)が出てきた。わが国は、昭和20・21・22年と食糧危機の底であったが、昭和23年度に、ようやく遅配・欠配なしの状況になり、昭和24年9月9日、連合国軍最高司令官が、日本政府に対し、同25年度における甘藷及び馬鈴薯の統制撤廃を承認した(皮肉なことに昭和24年は、甘藷、馬鈴薯は、最高の作付面積に達成)。

丸山は、敗戦後の食糧難の時期も、甘藷を普及させる仕事をした。昭和24年10月20日、高松宮両殿下を、「駒場明朗農場ニ奉迎」した。また、群馬県の報徳社有志が、宮城において、甘藷掘り取り後の雑草の敷込その他の作業に奉仕中の昭和24年11月25日午後3時頃、昭和天皇・皇后が来て、天皇が「食糧事情はどうか、生活の模様はどうか、／報徳社は今何をしておるか」と質問し、「私も報徳の精神は日本の再建に常に役立つ事と思ふから、しつかり頼みます。」(『報徳』第49巻第1号、大日本報徳社、昭和25年1月、p.4)と述べた。

昭和23年夏、長期入院をした頃、「無理な望みを抱かず分を守つて与えられた使命を果すことを努め常に高尚なる理想に向つて進むならば如何なる環境に在つても心は光風霽月^(せいげつ)(雨の後の晴れ渡った空の月-

引用者注)の如く晏如^(あんじょ)として無碍^(むがい)(さまたげがないこと-引用者注)の境地に住することを得おのづから感謝の生活となる。」(丸山 昭和24年、p.198)、と戦後も「感謝」を語った。第4期の甘藷関係の著書は、以下のとおり。

- ・丸山(昭和21年7月)『生理応用 甘藷の多収穫栽培法』大日本雄弁会講談社。
- ・丸山(昭和24年4月)『これからの甘藷栽培法 附=上手な貯蔵と加工』大日本雄弁会講談社。

Ⅴ. 第5期:国家的要請の任務から解放され最終的な境地に至った時期:最晩年

戦中・戦後の激動を体験してから時間が経った後の最晩年に、「人間より植物の方がよほど利口です。だんだんみかんに教えられて、この頃はだぶんよいものがつくれるようになりました。」(小出 昭和33年、p.180)、「甘藷の研究によつて与えられし感想…／人間の能力は量り難く、作物の生産力また偉大なり、然るに浅薄なる自己の経験と知識とがそれを制限して、正しき認識を誤まり、希望と確信とを妨げる。」(同上)、などと語った。この中の「人間より植物の方がよほど利口」や、人間の「浅薄なる自己の経験と知識」が「希望と確信とを妨げる」は、「戦争を起こしてしまう人間よりも、人を助けてくれる植物(甘藷など)の方が利口」という境地に至ったと筆者は捉える。

亡くなる1年前、「人間には何時死んでも悔ひなき準備が必要…宇宙の永遠に比べて人の一生は餘りにも短いされば短き命を意義深く力強く生きん為には…今日より取

りかゝれ／…衣食住は皆神仏の恩沢である我等は各々本分を尽し、それに奉仕するのが当然…、更ニ一步を進めてその材料、空気、太陽にまで考へ及べば宇宙に帰依し宇宙正法を信じて感謝の活動をせずには居られない筈である かうして宇宙は我が家となる」(〈昭和37年か〉8.12記、『座右銘』)と綴った。「正法」を示しているとする「宇宙に帰依」し、農作物や自分を育んだところの「宇宙」という我が家に帰っていかうとしたと思われる。

丸山は、以下のように多くの表彰もされた。①昭和15年1月15日、高松宮附宮内事務官古島六一郎から「有栖川宮記念厚生資金」を以て銀製花瓶壹個を受けた(その時、「幾年も諸に捧げし真心の雲井に通ふ今日の嬉しさ」〈杉本、p.69〉と和歌を詠んだ)、②同32年11月3日、愛知県から産業功績者として表彰、③同38年、愛知県新城市名誉市民、他多数。

昭和38年6月16日、新城市で永眠した(数えで97歳)。

〔引用・参考文献〕

- (1) 前田寿紀(平成15年3月)「戦中・戦後における『大日本報徳社』の甘藷増産活動に関する研究(1)－『丸山方作日記』『河井弥八日記』の分析を中心に－」、淑徳大学社会学部『淑徳大学社会学部研究紀要』第37号。
- (2) 杉本良(昭和26年)『われ飢ゑざりき 丸山方作先生の風格と甘藷増産運動の顧望』自費出版、「掛川信用金庫」会長杉本周造家・河井修家所蔵、(丸山親交者杉本による丸山からの聞き取りによる記述)。
- (3) 小出孝三(昭和33年)『郷土を興した先人の面影－その思想と業績－』日本自治建設運動本部、新城図書館所蔵、(序は石黒忠篤)。